XVIth International Symposium on Retinal Degeneration に参加して

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-04
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 久野, 優
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/40223

『学会見聞記』

XVIth International Symposium on Retinal Degeneration に参加して

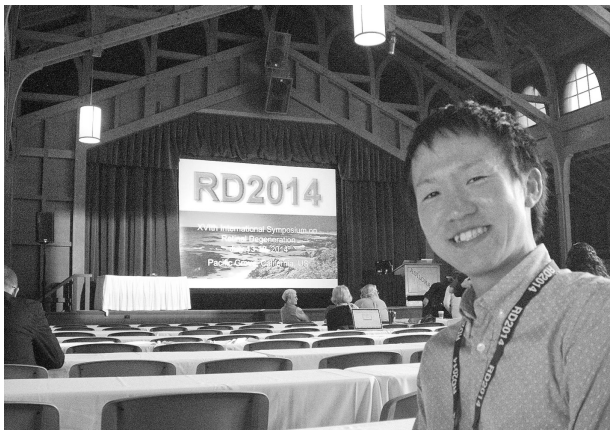
It participates in XVIth International Symposium on Retinal Degeneration

金沢大学院　医薬保健学総合研究科　保健学専攻
医療科学領域　病態検査学講座　分子生物検査学
博士前期課程２年
久　野　　優

2014年7月13日から18日までの5日間，アメリカ合衆国カリフォルニア州パシフィックグローブにて，XVIth International Symposium on Retinal Degeneration (通称RD2014) が開催された．モントレー半島の海岸沿いに位置するアシロマ カンファレンス グラウンズというホテルに滞在し，発表はこの敷地内にて行われた．気温は日中20℃前後，終始好天に見舞われ，眼前には広大な太平洋．至極快適な環境に包まれながらの和やかな国際シンポジウムとなった．

開催期間中，口演やポスター発表にて網膜変性疾患に関するテーマの研究発表が数多くなされた．興味をひかれた口演をひとつ，詳細に紹介したいところであるが，なにぶん私の未熟な英語リスニング能力によって聴き取ったものであり，演者の真意との齟齬があってはいけないので，簡単な紹介にとどめさせていただく．Machelle T. Pardue氏はExercise protects photoreceptors in induced and inherited models of retinal degeneration，つまり (有酸素) 運動が光また遺伝的に作製された網膜変性モデル動物において視細胞を細胞死から保護する役割があるというテーマで発表された．視細胞の数が細胞死によって減少し，視細胞の層が薄くなることで進行性に失明してしまうのだが，週に5日，60分間ホイールにて運動しているモデルマウスはそうでないモデルマウスに比べて視細胞の数がおおよそ倍保存され，視機能も同様に保存される，という内容であった．有酸素運動が細胞にもたらす有益な効果は基礎研究において広く議論されているが，網膜変性疾患の治療にも応用しうる可能性があるという点で非常に興味深い発表のひとつであった．

海外における国際学会でのポスター発表は私にとって初めての経験であった．私は「Neuronal nitric oxide synthase as a trigger of the N-methyl-N-nitrosourea-induced photoreceptor cell death (N-メチルニトロソ尿素による視細胞死と神経性一酸化窒素合成酵素の関連)」というタイトルにてポスター発表をさせていただいた．網膜色素変性症という進行性の後天的失明を引き起こす難病の発症機序の新たな一部分として，神経性一酸化窒素合成酵素の活性化があるという可能性を示し，同疾患の新たな治療法を示唆する内容であった．予想よりも多くの方に声をかけていただき，一人の例外もなく私が話すことに真剣に耳を傾けてくださった．結果，私にとって非常に有意義な議論ができ，大いに収穫があった．ポスター会場にはビールやワインが用意され，瓶やグラスを片手に議論を交わす光景が散見された．したがって会場の雰囲気そのものはとても和やかなのだが，説明，質疑応答，ディスカッションすべて英語で行うということが私にとって大きなプレッシャーであり，峻厳な緊張とともにポスター発表に臨むこととなった．しかし会話を重ねるにつれて慣れ，次第に会場の雰囲気に似つかわしい表情で議論できるようになったのではないかと振り返って思う．かくしてRD2014は西海岸らしい軟らかな雰囲気のまま幕を閉じ，参加者各々は笑みを湛え自国へと発った．

今回の学会では，いずれの演者も発表の合間にジョークを挟み，それに呼応して会場全体に笑い声が響いていたことが記憶に強く残った．発表内容が学術的に素晴らしいことは語るに及ばないのだが，国内の学会における口演に比してパフォーマンス色が強いように感じ，演者聴衆どちらも発表そのものを楽しんでいた．

RD2014の会場は特に夕暮れの景色が美麗で，今もその景色は心に刻まれている．この感動は他でもない視覚によるものであり，視覚を奪われた世界中の患者はこの感動を得られないのだと思うと非常に心が痛い．網膜疾患の研究が進み，失明に悩む患者がいなくなることを願うとともに，私もその輝かしい未来が1日も早く実現するため研究に取り組み，その助力となれるよう惜しまず努力を続けたい気持ちを述べることで，RD2014の見聞録を締めくくらせていただく．